

るゝと聞ゆれば金融の途塞り、(大乘院寺社雜事記  
應仁元年四月六日條に近日德政事、及其沙汰之  
間、傳借事一向不叶旨申之と見ゆ)土倉は廢業し  
て日錢屋なる高利を貪る似非土倉を生じ、其の營  
業を續くるものもありても、利率を高め、幕府を  
して法定利率以上の高利を貪るを取締らしめしこ  
とあり。(長祿三年十一月二日御教書)土倉の減少  
は此利上と共に貴賤上下の均しく苦痛とするこ  
ろにして、文安二年九月幕府が土倉の廢業を許さ  
ざりし一理由は「諸人の愁歎」の一事にてありしな  
り。

## 個體概念

されば此點に於て土一揆の土倉(酒屋も)退治は縱  
ひ彼等が焦眉の急を凌がんが爲明日の利害を顧る  
の違なかりしに依るとはいへ、聊か自殺的愚擧た  
るを免れず。徳政令の發布を目的とする土一揆が  
暴風の去來するが如く間歇的に發生したりし事實  
は最も雄辨に此間の消息を語るものと謂ふべし。  
此の如き危険状態にありたる土倉が尙ほ晏如とし  
て其營業を續けたりしは幕府の廢業禁止令にも依  
るべしとはいへ、恰かも氾濫の爲め、屢農作物を  
一掃せらるゝ河床近き低地の農民が他年の豊稔を  
夢みて其地を去り得ざるにも比すべからんか。

文學博士 西田 幾多郎

ライブニッツは氏の哲學の發展を見るべき重要  
なるドッキュメントとして知られて居る「アルノ

ーの論争」Correspondance de Leibniz et D'Ar-  
naud. 1686-1690の中に、一般概念 la notion

spécifique に對して個體概念 la notion individuelle の本質を明にして居る。ライブニッツはすべて眞なる命題は主語の中に述語が含まれて居らねばならぬ Prædicatum inesse subjecto veræ propositionis といふ考から出立して、眞の個體概念とはその中に或物に生じた又生ずるすべての事件を含んだものでなければならぬと考へた。アダムの概念の中にはアダムによつて生じたすべての事件が含まれて居らねばならぬ。一般概念とは之に反し或物の一般的性質のみを含んだものである。従つてその存在に關する特殊なる何等の事情をも含んで居らぬ。アルヒメデスがその墓の上に置いたといふ球の概念は種々特殊なる事情を含んで居るが、球の概念はその一般的性質しか含んで居らぬ。而してライブニッツの哲學によれば、神は一般的性質の結合によつて成る無限に可能なる世界の中から最善なるものとして此世界を創造したと云ふのである。例へば最初の人たるアダムの徑路についても無限に異なる徑路が考へられたであらう。我々の祖先のアダムの歴史はその一である。併し神が此一つのアダムを創造した時、之を全世界との關係に於て定めた。アダムの個體概念の中に盡未來に亙りてアダムによつて起るすべての事件が含まれるといふことは、アダムに於て起る一々の事件が豫定調和によつて全世界との關係に於て定められたといふことを意味する。個體が個體となるといふことは全世界と動かすべからざる關係に入込まねばならぬ。ライブニッツは近世哲學に於てはじめて個體概念の眞相に到達した人といふことができる。

何年何月何日何時何分何秒に日食があつたといふことは、ナポレオンが何年に何處で生れたといふと同じく、一度あつて二度と繰り返すことのできない唯一の事實である。無論單に日食といふ事

件ならば幾度にても繰り返すことができるであらうが、唯宇宙發展の過程に於て、何月何日何時何分といふ如き時點は、永久に再び繰り返すことはできぬ。縦、ニーチエの「永久の繰返し」の考に於ての様に、すべて此世界が同一の状態に歸り來ることがあるとしても、少くとも時間の形式に於て同一の點は再び之を繰り返すことはできぬ。何月何日の日食が繰り返すことができないと考へられるのは、此の如き宇宙時の上に限定して考へられる故である。すべて或一つの物が唯一と考へられるには全體との關係に於て限定されなければならぬ。單に經驗内容としては幾度にも繰り返すことができると考へ得る日食が、時間上に限定されることによつて、繰り返すことができないと考へられるのは、時間の形式がカントの云つた如き經驗成立の根本的約束であつて、宇宙は時間の中に含まれて居ると考へられる故である。即ち時間

上に於て限定されるといふことは全體との關係に於て限定されることを意味するのである。時間的限定によつて或物が繰り返すことができないと考へられる如く、因果的關係に於ても斯く考へ得るであらう。何月何日の日食は過去の過去から未來の未來に互る無限なる宇宙因果の連鎖に於て再び繰り返すことはできぬと考へられる。而してそれは時間の場合と同じく因果律は存在の根本的條件と考へられる故である。

此筆、此机、此猫、此犬といふ如きものも唯一のものご考へるのであるが、我々は何によつて此等のものを唯一と考へるのであらうか。此場合に於ては日食の場合に於ての様に或事柄が唯一と考へられるのではなくして、或物が唯一と考へられるのである、即ち此等のものは唯一の事件ではなくして唯一の物である、個事ではなくして獨立の個物である。個事と個物と如何に異なるか。日

食といふのは太陽と月と地球との位置上の關係から起つた一時的の現象であるが、此筆、此机、此猫、此犬といふのは一定の性質を持続する統一體である。太陽、月、地球も此の如き個物であつて個事は此等の個物の關係に於て現れると考へることが出来る。無論此筆、此猫などは言ふまでもなく、太陽、月、地球の如きものであつても、何處までもその統一を持続するか否や不明である、否何物も永久持續することは困難であらう。太陽、月、地球といふ如きものも、化學的元素の一時的結合であつて、更に現今の物理學にて考へられる如く、元素も破壊し得るものとするならば、すべてが電子の結合といふことなるであらう。然らば電子は如何にして個物と考へられるか。電子はすべて同性質と考へられるならば、電子其物の性質によつて何等の區別はできない。單に一號二號としてその空間時間上の連續を跡附けるの外はな

らう。而して一つの電子永久不變にして時間空間上無限の關係に入り込むといふことは、一方から考へれば、一つの電子は時間空間的宇宙の全體系に於て、或定められた運命を有つといふことなればならぬ。電子一號は一號で定められた進路があり、二號は二號にて定められた進路があるといふ事ではなければならぬ。此場合に於ても全體系中に於て定められた唯一の位置といふことが、其物を唯一と考へしめるのである。唯個事と個物と異なるのは、個事とは一つの直線上に於て定められた一點の如きものであつて、個體とは平面上に定められた一直線の如きものである、宇宙體系の進行上に於ける定つた一縦線である。斯くしてライブニツツの考へた如く個體は連續であり、生じたもの又生ずるものを含むといふことができる。

(Chacune de ces substances contient dans sa nature legem continuationis seriei suarum operation-

nm, et tout ce qui lui est arrivé et arrivera)。個體概念の成立するには全體系が直線的ではなくして平面的でなければならぬ。我々が此筆、此机、此猫、此犬といふ如きものを個體として唯一と考へるのも、此の如き考に基くのである。

個體概念は右に述べた如きものとして、個體は如何なる性質によつて己自身を他から區別するか。若し電子といふものが物理學者の考へる如く同質的のものであるとすれば、電子其物の性質によつて、其一を他から區別することはできない、唯甲と乙との時間空間上に於ける経路の差異によつて分つの外はない。之に反し個體其物の性質によつて、一が他のすべてから區別せらるゝと云ふならば、デモクリタスの原子が形狀大小に於て、ライプニッツの單子が視點や明暗の度に於て、無限に相異なる如く、いづれの個體も同じきものなく、如何に相類似する個體といへども、何等かの

性質によつて相異なつた所があると考へなければならぬ。併し單なる性質上の差異といふことは未だ眞の個體概念を與へることはできぬ。すべての物が一つの體系の中に統一せられ、嚴密に全體との關係に於て限定せられて、はじめて唯一の個體といふ如きものが考へられるのである。水が蒸氣となり、又氷となつた時、我々はその性質の異なるにも關らず一つの個體と見るのである。之に反し、氷は水よりも硝子に似て居るとしても、氷と硝子とは同一の體個とは考へられないのである。性質上、或個體が限定せられるには、その背後に統一されたる全體系の考がなければならぬ。

一般概念とは之に反し、ライプニッツの球の例に於ての如く、己自身に於て完成せる具體的體系によるのではなく、若干の内容を限定したものである。如何に多くとも我々が之を盡し得るものがある。數學的眞理が最も一般的と考へられるのは

之によるのである。物理學的法則の如きも、我々の具體的經驗の或性質を限定することによつて成立するのである。或る一つ他に類例なき原子があつて、化學者がその性質を知り盡したとしても、その物の個體概念を得たとは云はれない、それはその原子の歴史が加はらねばならぬ。實在の數が無限であつて、全體を知ることができぬにも關らず、一つの物が個體と考へられるのは、何等かの意味に於て、全體系の本質が知られ居ると考へられる故である。全體との關係を其物の性質の中に入れて見ることによつて、個體概念が成立するのである。全體と動かすべからざる關係に於て立てば立つ程、個體的となるのである。

或物が眞に全體との關係に於て限定せられるには、部分の中に全體の意味が含まれねばならぬ。例へば曲線の各部分に曲率の意味が含まれて居る様なものでなければならぬ。全體は部分に對して

單に一般的典型ではなく、部分は全體の單なる一例ではなく、全體と部分とは内面的關係を有つて居なければならぬ。一平面上に順序なく散在する點も、一曲線を形成する連續點も、點といふ一般概念に對しては、いづれもその一例にすぎぬかも知らぬが、後者に於ては全體と部分との間に内面的關係が成立つて居る。點は單なる點ではなくして、一つの個體となるのである。個體に對する一般は單にその一般的典型ではなく、創造力でなければならぬ。即ち一般の中に特殊化的作用を含んで居らねばならぬ。個體はまた單なる個體ではなくして、其中に全體との關係を含んで居なければならぬ。此等の關係は恰も或曲線とその代數方程式との關係の如きものでなければならぬ。或曲線の點といふのは、概念に曲線上の位置といふ性質が附加されたといふ以外に或物がある。關係が要素其物の中に内在的である。要素は全體の部分と

して意義を有するのである。勿論見方によつては類々種々の形式による概念的知識は不完全なものであつてすべて眞理は全體と個體との關係に達すると考へることもできる。兎に角我々は單に或物の性質の枚擧に於て終極の個體概念に達するのではない。却つて逆に背後に横たはる全體の概念から個體概念を限定せねばならぬのである。而して此時我々は知識の立場を變ずると考へねばならぬ以上論じた如く個體概念は全體からの内面的限定によつて之に達する事ができるとするならば、我々の經驗的知識に於て我々は眞の個體概念に到達する事は不可能であると考へることができ。豫定調和を策した神のみ之を知ると云ふべきであらう。たゞ我々の經驗を統一し、知識を構成し行く上に於て、自ら二つの態度があり得ると思ふ。一つは、具體的經驗をできるだけ一般的要素に分解して、その一々の關係を一般的法則によつて説

明し行くのであり、一つは雜多なる經驗を個體と見て、全體の統一を求め、更に之を背後の全體の部分と考へ、何處までも全體の背景を豫想して、綜合的に進み行くのである。恰も彫刻家が大理石から像を刻み出す如く、無限なる全體の上に新なる實在のレリーフを作るのである。具體的經驗の一々の連鎖を一般的因果律によつて考へるといふこと、全體を統一して個體概念を構成するといふこととは決して矛盾するものではない。却つて一の連鎖を因果的に明にするといふことによつて全體の統一が明となるのである。唯自然現象に於ては要素の統一の上に何等の新らしい實在の姿を見る事ができない。單に時間空間の上に於て物質の盲目的結合と考へるの外はない。然るに精神現象に於ては、ヴァントなども心理的因果を以て創造的綜合と考へ居る如く、要素の綜合の上に新なる意義の實在を生ずると考へねばならぬ。否要素

は却つて此統一の上に於てその實在性を有するの  
 である。是故に精神科學に於ては個體概念に基く  
 個性の學問が獨立の基礎とを有する根本的學問と  
 して考へることができるのである。自然科學の中  
 に於ても生理學や生物學などは統一的發展を論ず  
 ると考へられるでもあらうが、此等の統一的概念  
 は説明の問題であつて、説明の基礎とはならぬ。  
 若し之を説明の基礎として用ゆるならば、一種の  
 テレオロジイに陥るであらう。個體概念に基く精  
 神科學に於て、比較や分析によつて一般的性質や  
 因果の連鎖を明にする事が不必要であるといふの  
 ではない。唯單に此等の方法によつて個體知識が  
 明にし得るであらうか。余は別に全體の直觀より

出立する綜合的見方がなければならぬと思ふので  
 ある。前者は却つて後者の手段と考へることがで  
 きる。是故に個體的知識を目的とする精神科學に  
 於ては、藝術學と同じき創造的想像の力を要する  
 と考へるのである。  
 此論は必ずしも歴史に就て論じたのではない。  
 歴史とは如何なるものか、歴史に暗き余は何事も  
 言ふことはできない。又個體概念と一般概念との  
 區別及び關係などについても十分に論じては居ら  
 ぬ。唯若し個體的知識を目的とする學問があるな  
 らば、右の如きものであつて、而して精神科學の  
 中に此の如きものがあり得ると信するのである。

## 戰國時代以後に於ける甲冑の變革に就て (上)

文學士 江馬 務